生の名著です”と教えて下さった。のちに大学を出て数年後、私は欧州遊学中、ロンドンのベッドフォードカレジのJ. オーダス（J. L. Audus）教授を訪ねる機会をもった。オーダス教授は屈性とホルモンの研究者で、私に巨大な静電気の装置を示し、もし自分が幸運なら、この装置で電気屈性がオーキシンの不等分布によって説明できるか否かがはっきりできるかも知れない、と語った。話しが外れたが、私が宮本先生の授業を受けた高等学校 2−3 年生のとき、先生に私は坂村先生の本を買いたい、と申したところ、宮本先生は“近いうちに改訂版が出るという噂だから、そのほうを買ったらどうですか”と仰言った。植物学科などに入ったら将来、飯が食えないからおよしなさい、という宮本先生の反対を押し切って京都大学理学部へ入って間もなく、坂村先生の植物生理学上巻が出た。この昭和 25 年、百万遍の書店で新発売の上巻を見つけ、アルバイトで溜めたお金でこれを買い求めたときには、とても嬉しく、これで漸く植物学学生になった、という気分であったことを今でも思い出す。しかし、私がとくに待ちこがれていたのは生長、運動を扱った下巻であった。下巻が出たとき、私は 2 回生になって間もない頃で、そろそろ卒業研究のテーマも考えようとしており、この下巻をむさぼり読んだ。この頃、同じ坂村先生の「植物細胞浸透生理」もあわせて読み、私の師である芦田譲治先生に細胞生理学的な方法でオーキシンの作用を研究したい、と申し上げた。卒業後、植物学雑誌に掲載された私の独文処女論文の別刷を坂村先生にお送りしたところ、思いがけず御返書を頂き、次に改訂を出すときには君の仕事を引用したい、と書いてあったので、大変感激し、また励みになった。ずっと後年、私が「植物生理学」を出したとき、広島に御在住だった先生にこの小冊を一部お送りしたとき、奥様からお手紙を頂き、先生が御病気であることを知った。

私事を長々とのべたが、直接に坂村徹先生の教えを受けなかった私のような者でも、右にのべたように先生の「植物生理学」によって研究者としての第一歩を踏みだしたわけである。このような例は私一人だけではないと思う。昭和 18 年以後、日本語で書かれた総合的大冊「植物生理学」は他に例がないわけで、植物生理学を学んだわが国の研究者で、坂村先生のこの大著をひもどいたことのない人は皆無であろう。はじめにのべたように、わが国の植物生理学の主な流れはペファー—三好学—柴田桂太の伝統を受け継いでいるが、坂村徹先生の植物生理学は、その不朽の名著によってわが国の研究者のほとんですべての人々に有形無形の影響を与えているといってよいであろう。（鳥山英雄編「坂村徹先生の追想」20−25 頁、開成出版株式会社、1982）

「芦田譲治先生の御逝去を悼む」

本学会の初代会長ならびに名誉会員であられた芦田譲治先生は、本年 10 月 8 日午前 10 時 57 分、御病気のため 76 歳をもって御逝去になりました。まことに痛恨のきわみであります。

芦田先生は明治 38 年（1905）4 月のお生まれで、第三高等学校をへて昭和 3 年（1928）に京都帝国大学理学部植物学科を卒業され、そのまま教室に残られました。ムジナモの捕虫葉の運動に関するきわめてユニークな御研究により昭和 14 年、理学博士の学位をうけられました。小動物の刺激をムジナモの感覚毛が受けると、＜その刺激が捕虫葉基部の運動部位に達し、これによってその内側の細胞が膨圧を失い、外側の細胞の吸水力によって葉が速かに閉じる。や

がて内側の膨圧が回復し、おそらく生長することによって葉が再び開く。＞先生は独自の実験方法によって以上のようなムジナモ捕虫葉の運動のしくみを明かにしました。

昭和 17 年、先生の師であった郡場寛教授の退官のあとをうけて教授となられ、昭和 44 年退官されました。そのご、昭和 46 年から愛媛大学長となられ、3 期目の途中、すなわち昭和 54 年春まで勤められました。京都大学御在任中は植物の運動、生長、植物ホルモンなどの御研究のかたわら、門下生の育成に努められました。また、微生物細胞の適応現象に興味をもたれ、酵母の銅耐性に関する研究グループを結成し、顕著な業績をあけられるとともに、現在第一線で活躍中の多くの後進のかたがたを育成されました。

このように芦田先生は研究と教育に情熱を捧げられるかたわら、大学の管理運営にも力を尽くされました。その京都大学御在任中、理学部長を 2 度（昭和 30－31 年、42－43 年）、学生部長を長期にわたって（昭和 33－39 年）勤められました。とくに大学紛争初期の理学部長御在任中の先生の御苦労は大変なものでありました。

しかし、私ども会員一同にとって忘れることのできないことは、本学会創設時の困難な時代における芦田先生の御苦労です。本学会は芦田先生と田宮先生を中心とし、国際植物生理学連合（IAPP）の設立とともに昭和 34 年（1959）創設されたもので、芦田先生が 5 期 9 年間、本学会会長を勤められたことは周知のとおりであります。本学会はその創設初期には経済的にきわめて困難な状態にあり、一時は Plant and Cell Physiology の発行すら危ぶまれていたと聞いております。本学会の和文誌「日本植物生理学会報」第 1 巻第 1 号（1959）のへき頭に芦田会長の書かれた“学会ことはじめ”が掲載されております。ここで先生はまず、本学会の目的として「植物生理学にいろいろな立場から関心をもつ人のすべてが、互に知り合い、知見を知らせ合い、考えを交換し合う広場に、この学会がなることを、多数の会員が期待していることと思う」とのべておられます。さらに先生は本学会の重要な事業として Plant and Cell Physiology の発行とシンポジウム開催の二つがあることを指摘されたあと、最後につぎのように結んでおられます。「しかし、強力な酵素類はそろっているのに、基質が十分でないのが現状である。（中略）どうしてもかなりの一般寄付をあつめ、また賛助会員の依頼をしなければならない。各方面の援助がえられるよう、みなさんの御尽力をお願いする次第である」。芦田先生のこの“学会ことはじめ”に本学会創設当時の芦田会長、田宮先生、高宮先生ら創設にたづさわった先生方の御苦労が偲ばれます。

このように間もなく創立 25 年を迎える本学会の歴史をふりかえりますと、その基礎がための時期において、芦田先生なくしては日本植物生理学会の現在の隆盛はありえなかったのではないか、と今さらのように先生の御努力に感謝の念を禁じ得ません。一個人としては敬虔なクリスチャンであり、絵筆をとり、そしてバルトークやオルフを賞でた芦田先生は、学問を愛し、御家族と友人、後輩、門下生をいつくしみ、そして大学のため、学会のために尽くす御一生を送られました。ここに日本植物生理学会会員のみなさまとともに心から先生の御冥福をお祈りいたします。（学会会長としての弔慰、日本植物生理学会通信 29：6－7、1981；同内容弔慰文「Professor Joji Ashida (190　5-1981), JSPP Newsletter 5:5-6, 1981）